

宮崎黄石オーラル・ヒストリー

まえがき

宮崎滔天は、近代中国の革命運動に深く関わり、孫文の戦友とも称される人物であった。その子孫である宮崎龍介（滔天の息子）、蒼岑（孫）、黄石（ひ孫）もまた、中国との深い関係を築き、政府・民間を問わず、戦前から戦後にかけて日中友好交流に尽力し、多大な貢献を果たしてきた。

本インタビューの出発点は、2022年10月末に遡る。藍天蔚の曾孫である藍薇薇氏が、東京大学博士課程の鍾周哲氏とともに、宮崎滔天のひ孫である宮崎黄石氏の自宅を訪問し、「辛亥志士後裔口述史」と題する、辛亥革命の志士の子孫たちが発起し、研究者が協力して進めている中国民間のオーラル・ヒストリー・プロジェクトへの協力を依頼したことに始まる。

その後、黄石氏の承諾を得てインタビューチームが結成された。メンバーは、神奈川大学教授の孫安石氏、東京大学博士課程の鍾周哲氏、神奈川大学博士課程の郭夢垚氏の3名である。

2023年4月から2024年4月にかけて、宮崎黄石氏へのインタビューは計3回実施された。第1回は2023年4月29日に東京都内の宮崎氏宅で行われ、孫安石氏と鍾周哲氏が参加し、記録は鍾氏が担当した。第2回は同年7月29日に実施され、前回の2名に加えて郭夢垚氏も参加し、記録を担当した。第3回は2024年4月3日、再び宮崎氏の自宅において談話会形式で行われ、孫安石氏、郭夢垚氏、蔣海波氏（神戸孫文記念館研究員）、藍薇薇氏が参加した。

以上のように、インタビューチームは3回にわたる聞き取り調査を通じて、合計約3時間分の記録を収集した。その後、郭夢垚氏が音声記録の文字起こしを行い、宮崎氏による数回の校正・修正を経て、本オーラル・ヒストリー原稿が完成した。

郭夢垚（神奈川大学）

2025年5月10日初稿

2026年7月7日修正

インタビュー実施状況

- 第1回開催日：2023年4月29日（土）
 - 時刻：14時～15時
 - 場所：東京都池袋・宮崎黄石宅
 - インタビュアー（肩書きはインタビューの時点）
孫安石（神奈川大学教授），鍾周哲（東京大学博士課程）
 - 記録：鍾周哲
- 第2回開催日：2023年7月29日（土）
 - 時刻：16時～17時
 - 場所：東京都池袋・宮崎黄石宅
 - インタビュアー（肩書きはインタビューの時点）
孫安石（神奈川大学教授），郭夢垚（神奈川大学博士課程），鍾周哲（東京大学博士課程）
 - 記録：郭夢垚
- 第3回開催日：2024年4月3日（水）
 - 時刻：10時～11時30分
 - 場所：東京都池袋・宮崎黄石宅
 - インタビュアー（肩書きはインタビューの時点）
孫安石（神奈川大学教授），郭夢垚（神奈川大学助手），蔣海波（神戸孫文記念館研究員），藍薇薇（藍天蔚ひ孫）
 - 記録：郭夢垚



2023 年 4 月 29 日，第 1 回インタビュー時の撮影。
左から孫安石，宮崎黄石，鍾周哲。



2023 年 7 月 29 日，第 2 回インタビュー時の撮影。
左から孫安石，宮崎黄石，郭夢垚。



2024年4月3日，第3回談話会時の撮影。
左から郭夢垚，宮崎黄石，藍薇薇，蔣海波，孫安石。



2024年4月3日，宮崎黄石宅にて撮影。
左から孫安石，郭夢垚，宮崎黄石，藍薇薇，蔣海波。

宮崎滔天略歴



出典：白浪庵滔天著，吉野作造校訂『三十三年の夢』福永書店，1926年。

宮崎滔天（1871-1922）は、明治・大正期の思想家・社会運動家で、熊本県出身。本名は宮崎寅蔵（虎蔵）。熊本民権党の八郎，土地復権同志会の民蔵，中国革命支援者の弥蔵を兄にもち，気丈な母に育てられた。兄・弥蔵の影響を受け，中国革命運動の支援を志す。

1897年に孫文と出会い，生涯にわたって中国革命を支援した。アジア諸国の連帯と西洋列強からの解放を理想とし，1900年10月，孫文の第二次挙兵（惠州事件）に際して武器調達に奔走。しかし，代議士・中村弥六の背任により失敗し，日本人同志間の内紛を経て浪曲師へ転身し，「落花の歌」などを演じた。

1902年には，半生記『三十三年の夢』を著し，自らの思想と中国革命の経緯を記録。1905年の中国同盟会結成にも尽力した。さらに1906～07年には雑誌『革命評論』を同志と発行し，世論喚起や中国人留学生の援助を訴えた。1922年12月6日，51歳で病没。長男は宮崎龍介。

滔天の活動は近代日中関係史において重要な位置を占め，明治期日本のアジア主義を体現した存在として，現代の日中関係にも多くの示唆を与えている。

宮崎黄石略歴



2023年4月29日、東京都池袋の宮崎宅にて撮影。

宮崎黄石（こうせき）、1946年に東京都で生まれる。辛亥革命の支援者として知られる宮崎滔天の曾孫であり、宮崎滔天の長男・宮崎龍介の孫にあたる。母・宮崎落蓼（ふき）は宮崎龍介の長女。東京で育ち、慶應義塾大学を卒業。その後、商社に入社し、機械の輸出業務を担当。1974年には中国の広州交易会に参加するなど、仕事を通じて中国との関わりを持つ。祖父や両親から受け継いだ辛亥革命の歴史と日中関係への深い関心を背景に、現在も辛亥革命関連の記念行事への参加や、家族の歴史資料の保存・公開活動に尽力している。

宮崎家と近代中国

目次

1. 個人的背景と家族の歴史
2. 辛亥革命とのつながり
3. 辛亥革命の歴史的意義と影響
4. 日本と辛亥革命の深い関係
5. 個人的な経験と回想
6. 歴史研究と資料保存の重要性
7. 現在の日中関係に対する考察

1. 個人的背景と家族の歴史

私は1946年11月、東京で生まれました。宮崎滔天の曾孫であり、宮崎滔天の長男である宮崎龍介が私の祖父です。我が家の歴史は、日本と中国の近代史と深く結びついています。

宮崎滔天は1871年に熊本県荒尾市で生まれました。彼は明治時代の思想家、社会活動家、そしてアジア主義者として知られ、孫文の親友であり、中国革命の支援者でした。滔天は宮崎家の末っ子で、成人後は郷里熊本を離れて東京に居を構えました。その長男である私の祖父、宮崎龍介は滔天の長男として、父の志を受け継ぎ、生涯にわたって日中関係の発展に尽力しました。

私の母、宮崎露蓼は宮崎龍介の長女で、二人兄弟の妹でした。しかし、母の兄（宮崎香織）が第二次世界大戦で戦死したため、母が宮崎家を継承することになりました。母は宮崎家の養子となった父と結婚し、宮崎姓を守り続けました。このような家族の歴史が、私と中国との深いつながりの基盤となっています。



1930年撮影。左から燐子（柳原白蓮）、宮崎露蓼、宮崎龍介、宮崎香織。

私自身は、生まれてからずっと東京で育ちました。特に池袋にある宮崎家の家で過ごしました。この家は宮崎滔天が晩年を過ごし、亡くなった場所でもあり、宮崎龍介が生涯を過ごした場所でもあります。私もこの家で生まれ育ち、家族の歴史と共に歩んできました。日々の生活の中で、辛亥革命や中国との関係を身近に感じながら成長したのです。

教育面では、東京で小学校から大学まで進学しました。慶應義塾大学商学部を卒業後、商社に入社し、機械の輸出業務を担当しました。1974年には、仕事の一環として中国の広州交易会に参加する機会がありました。これは、私にとって中国との直接的な接点の一つとなり、家族の歴史とは異なる形で中国を経験する貴重な機会となりました。ビジネスの観点から中国を見ることで、私は家族の歴史と現代の経済関係の両方を理解する視点を得ることができました。

宮崎家の墓は熊本県荒尾市にあります。現在の荒尾市には、宮崎兄弟の生家と「宮崎兄弟資料館」が設けられており、宮崎家の子孫が寄贈した文書、手紙、写真などが展示されています。一方、宮崎龍介の墓は神奈川県相模原市の顕鏡寺にあります。これは、我が家の歴史が熊本から東京へ、そして中国との関係を深めていった過程を象徴しているようで、非常に興味深く感じられます。私自身も、荒尾にある宮崎兄弟の墓と資料館を訪れたことがあります。

2. 辛亥革命とのつながり

私の家族と近代中国とのつながりは、曾祖父・宮崎滔天および祖父・宮崎龍介を通じて、非常に深いものがあります。私は曾祖父・宮崎滔天に会ったことはありませんが、幼い頃から辛亥革命を身近に感じながら育ちました。祖父と同居していたため、孫文や黄興をはじめとする革命家たちの写真や資料を日常的に目にしており、それらは単なる歴史的遺物ではなく、私たち家族の生きた記憶の一部でした。



黄興が宮崎夫人に贈った「儒俠者流」の書。



孫文が宮崎滔天に贈った「推心置腹」の書。2023年4月29日、宮崎宅にて撮影。

特に印象に残っているのは、1950年代に廖承志氏が我が家を訪れた時のことです。私はまだ小学生でしたが、その場に立ち会うことができました。廖承志氏は後に中日友好協会の会長を務めた人物で、我が家とは深いご縁がありました。彼は日本の早稲田大学で教育を受け、中国同盟会・国民党・孫文と深く関わった廖仲愷の息子でもあります。



1954年、東京で龍介・白蓮夫妻を訪れた廖承志（中央）ら。前列の右端に立っている子どもが黄石。

祖父の宮崎龍介は、宮崎滔天が1922年に亡くなった後も、辛亥革命関係者との交流を継続していました。李大釗や陳独秀といった、後に中国共産党の創始者となる人物たちとも交流があったと、家族の間では伝えられています。これは、辛亥革命と後の中国共産党設立との間にある歴史的なつながりを示す重要な事実です。祖父の影響から、私は辛亥革命を単なる過去の出来事としてではなく、現代中国の形成にも深く関わっていることを学びました。

第二次世界大戦後、宮崎龍介は中国との関係をさらに深めました。1956年、孫文生誕90周年の記念行事に招かれて中国を訪問し、毛沢東主席や周恩来総理と会見しました。天安門で撮影された写真にその様子が残っています。この写真は、我が家と中国の指導者層との密接な関係を物語っています。祖父のこうした活動は、辛亥革命期に築かれた日中関係が、戦後の新たな時代にも受け継がれていったことを示しています。

宮崎龍介は、1966年頃まで頻繁に中国を訪問していましたが、その後は次第に訪中の機会が減少していきました。おそらく、これは文化大革命の影響によるものと思われます。

文化大革命期の中国は情勢が極めて複雑であり、多くの知識人や外国と関わりのある人物が批判や弾圧の対象となっていました。このような状況下において、日本との関係が深い宮崎龍介のような人物が中国を訪れることは困難になっていったのは、想像に難くありません。この時期の変化は、中国国内の政治状況が日中関係に及ぼす影響の大きさを示す一例といえるでしょう。

祖父は1971年に亡くなりました。これは、日中国交正常化が実現する一年半余り前のことでした。1972年の国交正常化を祖父が見届けることができなかったのは残念ではありますが、彼の長年の努力が実を結ぶ直前だったと言えるでしょう。



天安門上での写真。左から周恩来，柳原白蓮，宮崎龍介，廖承志。



毛沢東（中央），郭沫若（その右），龍介・白蓮（右側）。

祖父の生涯は、辛亥革命から戦後の日中関係正常化に至るまでの激動の時代を体現するものであり、その歩みはまさに日中交流史そのものでもありました。その遺志を受け継ぎ、私自身も日中関係の発展に寄与していきたいと考えています。

3. 辛亥革命の歴史的意義と影響

辛亥革命は、1911年に勃発した中国の革命運動であり、2000年以上にわたり続いた帝政を終焉させ、中華民国の成立へとつながった歴史的な事件です。この革命は、中国の政治体制に変革をもたらしただけでなく、アジア全体にも大きな影響を及ぼした重要な出来事でした。日本の明治維新に匹敵する、中国近代史における大きな転換点と位置づけることができるでしょう。

辛亥革命は、20世紀初頭のアジアにおける近代化と独立運動の象徴的な出来事として広く知られて

います。しかし、この革命を一国の出来事としてのみ捉えるのではなく、アジア全体における変革の潮流の中で位置づけて理解することが重要です。

辛亥革命以前からアジア各地では近代化の動きが始まっていました。たとえば、朝鮮では1884年に金玉均が甲申政変を起こしており、これは辛亥革命よりもおよそ27年も前の出来事です。金玉均の改革への情熱は、後の辛亥革命に通じる思想的な土壌を準備したとも言えるでしょう。

また、辛亥革命とはほぼ同時期に活動していた革命家も存在しました。ベトナムのファン・ボイ・チャウはその代表的な一人であり、彼は日本への亡命中に孫文ら中国の革命家たちと交流を重ね、互いに大きな影響を与え合いました。ファン・ボイ・チャウが推進した「東遊運動」は、辛亥革命と呼応しながら、アジアの独立運動に新たな息吹を吹き込んだのです。

こうした革命家たちの活動を支え、つないだのが、宮崎滔天をはじめとする日本の大陸浪人たちでした。彼らは世界革命という大きな夢を抱き、アジア各国を飛び回って革命家たちを結びつけました。彼らの存在は、当時のアジアに広がっていた革命のネットワークを如実に物語っています。

辛亥革命の参加者たちの活動範囲の広さも特筆に値します。彼らは日本、上海、東南アジアを行き来しながら革命を推進しました。当時、飛行機による移動が一般的でない時代に、これほど広範囲に活動していたことは驚くべきことです。彼らは船や鉄道を使って移動し、各地で支援者を募り、革命の理念を広めていきました。この国際的なネットワークは、革命の成功に大きく貢献しました。

このように、辛亥革命はアジアの他の地域の運動と複雑に絡み合いながら展開していきました。それは単純な「影響を与えた・受けた」という関係ではなく、まるで生き物のように互いに刺激し合い、成長していったのです。19世紀末から20世紀初頭にかけて、アジア全体が近代化と独立への熱意に沸き立っていた時代、辛亥革命はその中心にあって、大きなうねりを作り出したと言えるでしょう。

辛亥革命の真の意義は、それが単独で起こした変化だけでなく、アジア全体の変革の流れの中で果たした役割にあります。それは、その後の各国の歴史に深い影響を与え、現代のアジアの形成にも大きく寄与したのです。辛亥革命を通してアジアの近代史を見ることで、私たちは当時の人々の情熱と、その遺産が今日まで続いていることを感じ取ることができるのです。

辛亥革命は、その後の中国の歴史にも大きな影響を与えました。1919年の五四運動は、辛亥革命の理想を引き継ぎ、さらに徹底した社会改革を目指す運動となりました。また、1921年の中国共産党の設立も、辛亥革命によって開かれた新しい政治的空間の中で可能になったと言えるでしょう。辛亥革命は、現代中国の政治、社会、文化のあらゆる面に深い影響を与え続けているのです。

4. 日本と辛亥革命の深い関係

辛亥革命と日本の関係は、想像以上に深く、多岐にわたります。孫文記念館の研究によると、約1300人も日本人が辛亥革命に関わっていたとされています⁽¹⁾。これは驚くべき数字であり、当時の日本社会が中国の革命にいかに大きな関心を寄せていたかを示しています。

この関係の核心となったのは、1905年8月に東京で行われた中国同盟会の結成です。孫文や黄興らによって結成されたこの組織は、辛亥革命の中心的存在となりました。東京での結成は、当時の日本が中国の革命家たちにとって比較的自由な活動の場を提供していたことを示しています。日本は、多くの中国の革命家たちにとって重要な亡命先となりました。孫文をはじめ、黄興、宋教仁、汪兆銘、胡漢民など、多くの革命家が日本で過ごし、革命の準備を進めました。彼らは日本で学び、留学生の中から支援者を募り、革命の戦略を練りました。

日本人による支援も革命の成功に大きく貢献しました。宮崎滔天をはじめ、犬養毅、頭山満、平山周、山田純三郎など、多くの日本人が革命運動を支援しました。彼らの支援は資金提供から精神的支援まで多岐にわたりました。たとえば、犬養毅は孫文の保護者的な役割を果たし、頭山満は玄洋社を通じ

て革命家たちを支援しました。これらの日本人支援者たちは、単に革命を助けただけでなく、日中間の文化的、思想的な交流の架け橋となりました。

日本在住の華僑コミュニティ、特に神戸の華僑たちも革命運動に大きく貢献しました。たとえば、王敬祥のような人物は資金援助や亡命者の保護などで重要な役割を果たしました⁽²⁾。神戸の華僑は、その経済力と国際的なネットワークを活かして、革命運動を後方支援しました。彼らの存在は、日本が単に地理的に近いだけでなく、革命運動の重要な拠点として機能したことを示しています。

日本に留学した多くの中国人学生たちは、辛亥革命の重要な担い手となりました。彼らは日本の近代化や明治維新の経験から強い影響を受け、中国社会の変革を志すようになったのです。なかでも、後に著名な革命家となる黄興、宋教仁、汪兆銘、朱執信、蔣介石らは、日本での留学経験を有しています。たとえば、宋教仁は法政大学で学び、日本の政党政治制度に強い関心を抱きました。この経験は、のちに中国同盟会や国民党の組織構築に大きく寄与することになります。

これらの留学生たちは、日本の憲法、教育制度、軍事組織、そして政党システムなどを詳細に研究し、中国の近代化のモデルとしました。彼らは日本の経験を批判的に分析し、中国の実情に合わせて適応させることを目指しました。さらに、日本滞在中に彼らは相互に交流し、革命の理念や戦略を練り上げていきました。1905年の中国同盟会の結成は、このような日本での留学経験と交流が結実した成果と言えるでしょう。彼らが日本で学んだ近代国家の概念、立憲政治の理念、そして革命の方法論は、後の中国の政治改革の青写真となったのです。

東京は中国語の革命的出版物の重要な発行地となりました。『民報』をはじめとする多くの雑誌が日本で発行され、中国に密輸入されました。これらの出版物は、革命思想の普及と革命運動の組織化に大きく貢献しました。

このように、辛亥革命における日本の役割は多面的で深いものでした。政治、軍事、思想、教育など、様々な面で日本は革命に貢献しました。この歴史は、日中関係の複雑さと深さを示すとともに、両国の関係が単なる政治や経済の枠を超えた文化的、思想的な交流に基づいていることを物語っています。

5. 個人的な経験と回想

私自身の辛亥革命との関わりは、主に家族の歴史を通じたものです。子供の頃から、多くの中国の要人が我が家を訪れるのを見てきました。廖承志氏の来訪や、祖父・宮崎龍介が中国を訪問して毛沢東主席、周恩来総理と会見した経験については、先に述べた通りです。こうした経験は、私に辛亥革命と現代中国との連続性を強く意識させました。

近年では、5年ごとに中国を訪問し、孫文や辛亥革命に関連する記念行事に参加しています。これらの行事は通常、北京で開催され、その後武漢、南京、上海、広州など、辛亥革命に関係する都市を訪れます。2011年の辛亥革命100周年記念や2016年の記念行事は特に印象深いものでした。

これらの訪問を通じて、辛亥革命の歴史が現代中国においてどのように受け止められ、継承されているのかを直接感じ取ることができました。

中でも特に印象深かったのは、辛亥革命に関わった人々の子孫たちとの交流です。たとえば、孫文のひ孫や黄興の孫など、革命家の子孫の方々と実際にお会いする機会がありました。また、商震の夫人が日本人であったと伺ったことなど、日中の個人的なつながりを物語る興味深いエピソードにも触れることができました。こうした交流を通して、辛亥革命の遺産が世代を超えて受け継がれていることを実感しました。

さらに、宋慶齡基金会との関係も重要です。基金会からはたびたび中国訪問に招かれ、我が家に伝わる歴史的資料の整理にもご協力いただきました。その成果として、2021年には『宮崎滔天家蔵民国人物書札手迹』（全8巻）が出版されました。これは、中国宋慶齡基金会研究中心と華文出版社との共同



2011年10月9日，北京の人民大会堂で開催された辛亥革命100周年記念大会の記念写真。



2016年11月11日，北京の人民大会堂で開催された孫中山（孫文）先生の生誕150周年記念大会の記念写真。



中国宋慶齡基金會研究中心編『宮崎滔天家藏民國人物書札手迹』全8卷，華文出版社，2021年。

プロジェクトによるものです。この出版事業を通じて、宮崎家が所蔵する貴重な歴史資料を広く公開し、辛亥革命研究に貢献できたことを、大変嬉しく思っています。

6. 歴史研究と資料保存の重要性

辛亥革命に関する研究と資料保存の重要性について、私は強い思いを抱いています。我が家には、当時の手紙や写真など、貴重な史料が数多く残されており、その多くは『宮崎滔天全集』（全5巻、平凡社、1971年～1976年）の編纂作業の際に整理されました。しかしながら、これらの中には、いまだ十分に研究が進んでいない資料も少なくありません。

残念ながら、現在では辛亥革命を専門に研究する若手研究者が減少傾向にあります。これは、辛亥革命に関する研究がすでに十分に行われたと見なされているためかもしれません。しかし、私はこの歴史を再検討する意義は、今なお大きいと考えています。とりわけ、日中関係の観点からあらためて見直すことには深い意味があるでしょう。



『宮崎滔天全集』全5巻、平凡社、1971年～1976年。

たとえば、新たな視点による解釈や未公開資料の掘り起こしなど、今後の研究には多くの可能性が残されています。また、辛亥革命を他のアジア諸国における独立運動や改革運動と比較研究することで、新たな知見が得られることも期待されます。さらに、辛亥革命が現代中国の政治や社会にどのような長期的影響を及ぼしているかを分析することも、重要な研究課題の一つです。

加えて、資料の保存と公開も極めて重要な課題です。これらの貴重な史料を研究者や一般の人々がより利用しやすいかたちで公開していくことが求められます。こうした取り組みを通じて、辛亥革命の歴史がより多くの人々に理解され、その意義が再評価されていくことを心から願っています。

7. 現在の日中関係に対する考察

辛亥革命の歴史は、現代の日中関係を理解するうえで重要な背景のひとつです。両国の関係は政治的側面にとどまらず、文化的・歴史的にも深いつながりを有しています。

たとえば、両国は漢字文化圏に属し、仏教や儒教といった思想を共有しています。食文化や芸術といった面でも多くの共通点が見られます。こうした文化的共通基盤は、政治的な対立を超えて、両国の関係を支える大切な要素となっています。

辛亥革命期における日本人による支援や、日本に留学した中国人学生たちの活躍は、両国の関係が



2025 年 10 月 25 日、武漢での国際学術シンポジウムにて撮影された、日本からの参加者による記念写真。

前列左から、川尻文彦、宮崎黄石。後列左から、八百谷晃義、望月直人、郭夢垚。

なる政治・経済の枠を超えた深いものであることを示しています。このような歴史を理解することは、今日の日中関係をより建設的なものとするうえでも極めて重要です。

確かに、現在の日中関係にはさまざまな課題が存在しますが、こうした深い歴史的つながりをふまえたうえで対話を重ねることにより、より前向きな関係構築が可能になるはずです。とりわけ、民間レベルでの人的交流や文化交流を通じた相互理解の深化が求められています。

私は、2025 年 10 月 25 日、久しぶりに武漢で開催された「孫文と辛亥」——孫中山先生没後 100 周年記念および「オーラル・ヒストリーと辛亥革命研究」国際学術シンポジウム⁽³⁾に参加しました。コロナ禍以来停滞していた日中間の民間交流が再開されるなか、辛亥革命関係者の子孫としてこのような大規模な学術会議に参加できたことを、大変嬉しく思いました。こうした学術交流の場は、今後ますます重要になっていくと感じています。

私は、辛亥革命の歴史を通じて築かれた日中間の絆が、現代の両国関係にも活かされていくことを願っています。政治的な対立を乗り越え、文化と歴史を共有する隣国として、より良い関係を築いていけると信じています。そのためにも、辛亥革命の歴史的意義を、両国の若い世代にしっかりと伝えていくことが重要だと考えています。

注

(1) 孫文記念館編『孫文・日本関係人名録 増訂版』孫中山記念会、2012 年。

(2) 「解説：『王敬祥関係文書』から見た神戸華僑社会の政治活動と中華革命党の活動」, <https://lib.kobe-u.ac.jp/da/wangjingxiang/kenkyu/>

(3) 「孫文と辛亥」——孫中山先生没後 100 周年記念および「オーラル・ヒストリーと辛亥革命研究」国際学術シンポジウムは、2025 年 10 月 25、26 日、武漢にて開催された。宮崎黄石氏は宮崎家の代表として招待され、開幕式において宮崎家と辛亥革命、および日中友好事業との深い関わりについて紹介した。詳細は八百谷晃義・川尻文彦・郭夢垚「〔参加記〕『孫文と辛亥』——記念孫中山先生逝世 100 周年暨「口述歴史与辛亥革命研究」国際学術研討会」『中国研究月報』第 939 号、2026 年 5 月を参照。